

教員養成系大学の家政教育における人権意識を高める 授業デザイン：アセスメントのための指標に着目して

○富田 道子^{*1}・石垣 和恵^{*2}・齋藤 美保子^{*3}・小谷 教子^{*4}

要 旨

本研究は、これまで実施してきた共生・人の多様性理解を深めるユニバーサルデザイン授業にアセスメントの手法を取り入れることで、教員養成系大学の家政教育における授業改善へつなげる示唆を得ることを目的とする。具体的には、授業デザインにおけるアセスメントのための指標を作成し、授業実施の前後に指標の知識・意識調査を行い、授業直後にはワークシートに感想を記述させた。2時間という限られた授業時間であっても、身近な生活用品と社会環境の映像を切り口にした本授業を通して、共生・人の多様性理解を図り、自分も「多様な人・多様な存在」であるという当事者意識を育む可能性、公平意識を引き出すことを確認できた。

キーワード：家政教育、人権、アセスメント、授業デザイン、教員養成系大学

1. 研究の背景と目的

1.1 研究の背景

現代社会において急速に進展している社会・経済のグローバル化、情報化や技術革新は、人間生活を質的に変化させつつある。とりわけ学校教育においては、様々な背景を持つ人々が互いを尊重しあいながら協働し、多文化共生社会を実現することが求められており、文部科学省は教育の直接の担い手である教員の資質能力を向上させることが最重要課題¹⁾のひとつであるとした。この資質能力は一朝一夕に高められるものではない。大学の教員養成段階でそのためのカリキュラムが準備されるべきであると考えている。

1.2 研究の目的

本研究の目的は、これまで実施されてきた「共生・人の多様性への理解を深めるユニバーサルデザイン（以下、UDとする）授業」にアセスメントの手法を取り入れることで、教員養成系大学の家政教育における授業改善へつなげる示唆を得ることを目的とする。

* 1 広島都市学園大学子ども教育学部

* 2 山形大学地域教育文化学部

* 3 鹿児島大学教育学部

* 4 敬愛大学国際学部

2. 共生・人の多様性理解を深めるUD授業とは

ここでいう「共生・人の多様性の理解を深めるUD授業」とは、『家庭科UD学習手引書』を用いた、みる・ふれる・感じるをコンセプトにした授業である。

具体的には、受講学生を4～5人のグループに分け、それぞれに1・2個の身近な生活用品を渡し、①それらの製品におけるプロポーシオン、色、文字の大きさや文字間隔、書体などに施されている「さりげない配慮」をチェックする、②割り当てられた製品は「誰にとっての使いやすさ」が考えられているのかにふれることを条件にグループごとに発表をし、見つけた配慮点を交流する。さらに、③視覚教材を使用し、教室に持ち込めない公共施設や公共交通機関、情報サービスなどにおける「さりげない配慮」を確認することを通して、社会環境にUD視点が広がっていることを確認する、という構成になっている。

3. 研究方法

3.1 先行研究

富田らは、『家庭科UD学習手引書』に基づく中学生、高校生、大学生、小学校教員を対象にした先行研究（富田2014、富田、松岡2015、小谷他2018）から、教員養成系大学の家政教育における授業を念頭に、学修をより質の高いものにする、人権意識を高めるという視点に立った授業デザインを検討した。

3.2 授業デザインにおけるアセスメントのための指標作成

先述した先行研究では、「生活意識」「UD知識」「UD意識」の3分類に関する質問紙調査を行っていたが、共同研究者によるカンファレンスで大学生につけたい資質・能力を確認¹⁾²⁾後、教員養成系大学の家政教育での実施を念頭に精査し、現在教育現場で求められている共生・人の多様性、人権にかかわる項目も加え、授業デザインにおけるアセスメントのための指標を作成した（表1）。アセスメントの用語には、「評価」「査定」「評定」など様々な訳語があてられているが、ここでは石森（2013）のアセスメント概念「生徒の学びに関する情報を多様な方法によって収集し、学習の到達状況を把握するとともに、その意味を考え解釈して総合的に捉え、その後の教授・学習の改善に資する活動」を援用した。

具体的には、上述した3分類を「態度・価値観」「UD意識」「知識・理解」「行動」の4分類に修正し、「態度・価値観」の中項目として「他者との関係」「社会性」「多様性の尊重」を、「UD意識」の中項目として「UDの存在」「社会におけるUDの必要性」を、「知識・理解」の中項目として「基本的知識」「制度的知識」を、「行動」の中項目として「コミュニケーション」「問題解決」「情報収集」を設定した。加えて、詳細な指標として小項目も設定した。網掛けで示した項目が新たに加えたものである。

表 1 新たな指標

大項目	中項目	小項目
態度・価値観	他者との関係性	親との関係
		自尊感情
		友人との関係
		信頼できる人の有無
		分かち合い
	社会性	社会問題への関心
		勉強面白さ
		社会貢献
		自己の可能性
	多様性の尊重	長所・短所
		当事者意識
		傾聴・受容
		協調性
		多様性受容
UD意識	UD存在	身近
		意識
		生活への浸透
	社会における必要性	自分にとっての必要性
		学校環境
		UD普及の地域差
		生活の質
知識・理解	基本的知識	UDと環境整備
		「多様な人々」と「人の多様性」
		UDを標榜しない製品
		障がいのある人の暮らし方
		多様な「生活に不便を感じている人」
	制度的知識	人権・子どもの権利条約
		同性パートナーシップ条例
		障害者に関する条約・制度
行動	コミュニケーション	個人
		協働
	問題解決	学び発信
	情報収集	共生社会実現への行動
		多面的思考
		活用力

3.3 手引書・ワークシートの加筆・修正／視覚教材作成

新たに作成した指標をもとに、『家庭科UD学習手引書』とワークシートの加筆・修正をした。

まず、①UDの背景にある、国連の「障害者権利宣言」(1984年)や日本の「障害者権利条約」(2006年)の採択と、社会が抱えるさまざまな課題を背景に人権教育の推進が図られていることを踏まえ、教員養成課程における本授業の位置づけを明確にした。

次に、②私たちの生活のなかにUD製品が増えていることに気づかせるだけでなく、それらが「誰のためのものなのか」を考えさせることで当事者意識を育て、自分も「多様な人・多様な存在」であり、特別なニーズを持つ可能性があるという、人の多様性への理解を深めることをねらいとした。加えて、ワークシートへもこれを確認項目として加筆した。また、③その人のおかれている立場・状況の違いにより社会環境への適応の仕方が変わってくることから、「バリアの両義性」の説明も加えることで、画一的なものの見方ではなく多角的に物事を捉えられる学生の育成を図った。

さらに、④近年注目されているピクトグラム、⑤これまでの手引書にはなかった聴覚障がい疑似体験、⑥「多様な人」の事例のなかに「LGBTI」や「発達障害等の障がい」、「特別な配慮は不要だと思っている人」を加筆した。

加えて、どの大学でもすぐに授業ができるよう、新たに視覚教材も作成した。

3.4 調査対象者と調査時期

調査対象者は、東北、関東、関西、中国、九州地方の教員養成に関わる国立・私立大学および短期大学の学生193名であり、授業実施時期は2017年6月～11月である。

3.5 調査方法

修正した手引書による授業実施前後に新たな指標に基づく質問紙調査を行い、授業後にはワークシートに感想を記述させた。本研究では、先行研究における記述分析結果との比較をすることで学生の学びを検証した。

4. 結果と考察

4.1 感想の自由記述分析

受講学生に自由記述を求めたのは1)「UDは誰のためのものか」と2)授業全体の感想の2点である。まず、前者については、すべての学生が「自分も含まれている」という当事者意識にかかわる記述をしていたことが確認できた。

次に、学生の感想記述内容を先行研究で使用した分類をもとに分析した結果(表2)、2015年の先行研究では「発見(気づき)」「視野の広がり」「主体的行動」に関する記述割合の高さに特徴があったが、2017年の記述割合は分類項目全体に散らばり、とりわけ「公平さ」は2015年の15.8%から33.2%に高まった。

また、「主体的行動」一項目で捉えると、2017年の記述割合は減少しているが、分析結果を俯瞰すると、「応用する」の小項目『児童との関わり』『授業の工夫』『学習環境』の合計割合は2015年の0.5%から17.2%に高まったことが確認できた。

加えて、「その他」の小項目『作り手への感謝』の記述割合は、2015年の4.1%から11.4%に高まった。

表2 感想の自由記述分析

分類 項目	わかる			深める		推進する 主体的 行動	提起する 課題・ 疑問	専攻学科 との関連	応用する			その他		
	驚き・ 感動	発見・ 気づき	面白さ・ 楽しさ	視野の 広がり	公平さ				児童との 関わり	授業の 工夫	学習環境	作り手へ の感謝	地域差・ 海外差	平俗
2017調査 (%) n=193	19.7	88.6	4.7	37.3	33.2	26.4	7.3	0.0	4.7	7.8	4.7	11.4	3.6	0.0
2015調査 (%) n=196	15.8	86.2	3.1	33.7	15.8	36.2	6.6	1.5	0.5	0.0	0.0	4.1	0.5	1.0

4.2 感想の自由記述例

学生の具体的な記述内容は表3の通りである。特徴的なことを大分類にそって整理すると以下ようになった。

表3 感想の自由記述例

分類 項目	わかる			深める	
	驚き・感動	発見・気づき	面白さ・楽しさ	視野の広がり	公平さ
主要な 記述 (2017)	○普段何も考えずに使っていたペンにも工夫がされていたということに驚いた。 ○日常的に使うもの、食べ物などを細部までみるとUDが施されていることにびっくりした。	○誰でもトイレのマークやクネットは初めて知った。 ○外国人にもわかるようにピクトグラムを使って誰が見ても理解できるようにしていることを初めて知った。 ○カラーユニバーサルデザインは自分の身近にあって気づいていないものが多くあった。 ○一人でなくグループで考えることで自分で気づけなかったことにも気づくことができた。 ○自分の性自認や性的指向が定まっていなかったりする人もいるのだと知ることができ良かった。もっと理解を深め、視野を広く持てるようにしたい。	○意識をすればどのような商品も工夫がされていて面白かった。 ○班ごとに調べた製品の配慮や工夫は見つけることは難しかったが、各班でみつけたものを交流することは多くの発見があり、面白かった。 ○配慮を探してみるととても深い意味が隠されているように思う。時々、難しいこともあるが、それがわかると面白いと感じる。	○他の班の様々な意見を聞き、考えを広げることができた。 ○色覚障がいの人から見ると色が大きく異なり、自分の見ている世界とは違う世界に住んでいる感覚になった。UDを考えるには様々な人の声を聞いたり体験をしてみることが大切だ。 ○UDは意識して見たり、その視点に立ったりしないと見逃してしまうものだと感じた。	○UDは障がいのある人のためという考えがあったが、全ての人が対象となっていることが分かった。 ○「すべての人が」という考えが重要であり、様々な人の立場に立てて足りない配慮をすることでより多くの人が充実した生活を送ることにつながる。 ○どんな人でも使いやすいデザインであればコミュニケーションもスムーズにできる。「○○できない」ということから生じる差別意識も抑制できる。 ○公共施設がUD化することで皆が平等に生活できるのが素晴らしいと思った。
主要な 記述 (2015)	○私は以前まで、UDは自分にあまり関係のないことだと思っていたが、こんなにも身近にあふれていることに驚いた。 ○普通の生活ではとても気づかないような部分にも配慮していることに驚いた。	○実際の駅の案内表示や路線図を見て、矢印がバラバラだった。それだけでも見にくいというのを改めて知った。	○見ていて楽しいUDが多い。 ○UDのさりげない配慮を見つけたの楽しかった。 ○グループごとに分かれて他の人と話しながらUDを見つけたのはとても楽しかった。	○学校現場でも様々な子ども(障害者、左利きなど)への配慮と工夫をしていかなければならないと思った。 ○今、目に見えていない潜在している問題について考えることが大切だと学んだ。 ○自分本位で考えるのではなく、違う視点で物事を見ることが誰もが暮らしやすい環境を作ることになる。	○多様な人々がいるなかで不便の度合いは人によって違うが、誰もが快適に暮らしていけることが大切であると思った。 ○体に不自由があるひとだけでなく、だれもがみな公平に使える原則を知ることができてよかった。

分類	推進する	提起する	応用する			
項目	主体的行動	課題・疑問	専攻学科との関連	児童との関わり	授業の工夫	学習環境
主要な記述 (2017)	<p>○授業で取り上げられていないUDを自分で探し比較してみたい。</p> <p>○これから児童に教える立場になるので、UDをまず自分が意識していきたい。</p> <p>○UDが普及することで多様な人が生活しやすい暮らしができる。</p> <p>○マイノリティを含む、多様な人々を包み込む社会の形成が進められており自分たちもそのような多様さに対応していくべきだと思う。</p> <p>○先生を目指す立場として、多様性は身近なものであるため学生のうちからよく考えておきたい。</p>	<p>○小学校のデザインは誰が見ても利用しやすいものを作らないといけない。児童にもアイデアを出してもらおうが良いと思う。</p> <p>○性的マイノリティや知的障害者や情緒障害、LD、ADHDの人など、目で見えて分からない人たちにどう対応していくかが難しい。そのような目で見えて分からない助けが必要な人たちのためにどのようなデザインを作っていくのか、考えていくのがこれからの日本の課題だと私は考える。</p>		<p>○子どもの多様性を理解して接することができるよう人間になりたい。</p> <p>○一人一人個性が違うことは当たり前のものであり、教師となる人はそのことを十分理解し、子どもたちに教える必要があると思う。まずはLGBTについての正しい知識を持つ人を増やすことが、差別をなくす一歩になるのではないかな。</p>	<p>○教育現場で必要不可欠な黒板やチョークの色に関しても、見えにくい色、見やすい色があって、配慮が必要なのだと分かった。</p> <p>○学校にはいろいろな子どもが通学してくる。自分ももっともっとユニバーサルデザインに対する理解を深めて、さりげない配慮ができるようになりたい。</p>	<p>○UDの考え方を活用し生徒が生活しやすい安心できる環境や道具を考えていきたい。</p> <p>○どんな特徴や個性を持った子どもでも、楽しい毎日を学校で過ごせるような教育環境を作れるような教師を目指していきたい。</p>
主要な記述 (2015)	<p>○普段まったく気にしていないところにUDが使われていることを知ったので、これからいろんなものを見る時に、デザインの意味を考えながら見ようと思った。</p> <p>○私たちにも使いやすいデザインになっているので、これから生活していくなかでUDを意識してみたい。</p> <p>○生活者の意見を反映し、よりよい社会を作っていくことができると思うし、全ての人が共生できる環境に近づけたいと思った。</p>	<p>○UDを勉強し、身の回りに多くの配慮があることに気づいた。しかし、この前のネットニュースで、一般のトイレは90%以上が洋式なのに、小中学校は50%が和式という報道があった。ここにも課題があるように感じました。</p> <p>○駅のホームが傾いているところはたくさんある。また、ホームドアが設置できなくとも、ホームにベビーカー等の落下防止のための段差を作る配慮が必要だと思った。</p>	<p>○学科が特別支援なのでUDについてはよく習うことが多いが、身近なものについて改めて考えることがなかったので、実際に見て、さわってとても勉強になりました。</p> <p>○身近にUDがあること、そして、それを日ごろ何気なく使っていたということに気づきました。特別支援教育とUDは深い関連があります。</p>	<p>○視覚障害者、色彩判別が難しい人、聴覚障害者の人のためなどさまざまな人に向けてのデザインの工夫がたくさんあった。学校現場でも様々な子ども（障害者）への配慮と工夫をしていかなければならないと思った。</p>		

分類	その他	
項目	作り手への感謝	地域差・海外差
主要な記述 (2017)	<p>○普段使っているものが、作った人が「～したら使いやすい」とか試行錯誤をしてことを考えると、とてもありがたいことだと感じた。</p> <p>○一番感動したのは、ヤマト運輸の不在票です。作り手は本当にすごいと思った。</p> <p>○会社やメーカーによって全く異なること。使いやすさが昔と今では改善されていること。皆で詳しく商品を見ることで何故これが改善されたのかまで考えられた。</p> <p>○製品一つ一つには人を思う気持ちがこもっていると感じた。</p> <p>○デザインを作る人と使う人のつながり、立場や環境の違いと人の共生の視点が見えてくるようです。</p>	<p>○都市部ではトイレなどの改善が見られるが、地方では普及が遅れているのではないかと感じた。多くの人々が暮らしやすくなるためには、早めの対応が必要だと感じた。</p> <p>○ピクトグラムという言葉を知り、普段の生活で見えるもののなかに国際的な決まりがないのだとしたら、自分たちが旅行で外国に行く時大変だろうし、逆に日本に来る外国人も大変なことがあるのだとわかった。</p>
主要な記述 (2015)	<p>○UD開発者の技術の向上や知識の多さに感銘を受けました。</p> <p>○自分が使っている道具には、どんな人にも使いやすいよう様々な人が工夫されていたんだと感じた。感謝しなければいけない。</p>	<p>○駅のホームドアは東京以外にも設置すべき。</p>

1)「深める」のなかでは、「すべての人がという考えが重要であり、様々な人の立場に立ってさりげない配慮をすることで、より多くの人が充実した生活を送ることにつながる」など、『公平さ』の記述量が2015年と比較して倍増した。つまり、UD視点が生活用品などの社会環境に広がることを、便利な世の中になったという表面的な理解に留めず、多様なニーズをもつ人々に思いを馳せた記述をしており、共生・人の多様性を理解する学生が倍増したことがわかった。

- 2)「推進する」の『主体的行動』の記述割合は、2017年は2015年よりも約10ポイント低い、その内容には違いがみられた。2015年の場合、「普段まったく気にしていないところにUDが使われていることを知ったので、これからいろんなものを見る時に、デザインの意味を考えながら見ようと思った」など、意識して行動を変えてみようとする、緩やかな変容を記述しているのに対し、2017年の場合、「先生をめざす立場として、多様性は身近なものであるため、学生のうちからよく考えたい」など、そこに将来“教員になる”という自らの固有の立場を意識した、より実践的な行動に向かう記述をしていると推察した。
- 3)「提起する」の『課題・疑問』について、2015年と2017年でその割合に違いはなかったが、記述内容の傾向として、2015年は社会環境が多様なニーズを持つ人々に十分対応していないことを「小・中学校のトイレ」「電車のホームの危険性」を例に挙げているのに対し、2017年は「性的マイノリティや知的障害者など、外見では分からない、助けが必要な人たちのために、どのようなデザインを作っていくのか考えていくのがこれからの日本の課題だ」と想像力を高め、思考を深めた記述をした学生がいることがわかった。
- 4)「応用する」の『専攻学科との関連』は、2017年の場合、特別支援教育の専攻学生が受講しなかったため、それ以外の項目に注目した。その結果、2015年の学生は『児童との関わり』のみを記述していたが、2017年は『授業の工夫』『学習環境』についても記述していることがわかった。2017年の記述の社会的背景として、近年、特別支援教育に関わり「授業のUD」に代表される教育のスタンダード化が進行しているためその影響を瞬時に考えたが、内容を確認するといずれの項目も想定する児童を限定して記述していないことがわかった。例えば、①『児童との関わり』では「まずはLGBTについての正しい知識を持つ人を増やすことが、差別をなくす一歩になるのではないか」など、学生は障がいをもつ児童だけに焦点を当てて記述していないことがわかり、②『授業の工夫』では「学校にはいろいろな子どもが通学してくる。自分ももっともっとUDに対する理解を深めて、さりげない配慮ができるようになりたい」と、さらに③『学習環境』でも「どんな特徴や個性を持った子どもでも、楽しい毎日を学校で過ごせるような教育環境を作れるような教師を目指していきたい」と述べられているからである。以上のことから、記述割合は高くないものの、学生が多様なニーズをもつ児童をイメージしながら感想を記述したことが推察された。
- 5)「その他」の『作り手への感謝』は、2015年、2017年のいずれも記述がなされていたが、2017年の内容は多様な人を想定したものづくりへの感謝にとどまらず、「デザインを作る人と使う人のつながり、立場や環境の違う人との共生の視点が見えてくるようです」にみられるように、生活者と行政、企業とのコミュニケーションがあって、ものづくりや社会環境の整備がなされていることに思いを馳せる学生もいることがわかった。
- 6)「その他」の『地域差・海外差』について、2017年は調査対象校の所在地による地域

差に加え、ピクトグラムが存在を知ることにより、世界で共通したものがあることの重要性に気づく記述がなされていることがわかった。筆者らは、先に述べた「公平さ」に対する意識の高まりが、この思考を引き出したと推察した。

5. まとめ 2012年から手引書の改訂を続けて

2011年に『ユニバーサルデザイン教育プログラム』³⁾が開発された後、『家庭科UD学習手引書』という名前で改訂を続けながら6年が経過した。その間、2時間という限られた時間であっても、身近な生活用品と社会環境の映像を切り口にした本授業を通して、共生・人の多様性理解を図り、自分も「多様な人・多様な存在」であるという当事者意識を育む可能性を確かめることができた。とりわけ、本研究において授業の最後に「UDは誰のためのものか」を改めて問い、それをワークシートに記述させることで、学生から「公平」意識を引き出せることが明らかとなった。その背景には、本研究においてアセスメント手法を用い、そのための指標づくりをしたことで、各授業者が本研究のねらいを自覚して授業を実施できたこと、さらに、どのような職業に就こうと、一人の社会人として共生・多様性の視点は大切だという共通認識をもったことにあると思われる。

大学における教員養成は、教育課程コアカリキュラムの制定とそれに伴う教職課程の目標・内容の規定によって、教育の自由を制約せざるを得なくなっている。そのようななかにあっても筆者らは、さまざまな資料からこれからの教員養成カリキュラムのなかに「人間性を獲得していく視点を重視」する必要性を確認し、「不易の資質能力」として示される『総合的人間力』が十分育成されていない現実から、学生の想像力を高め、多様性理解、他者理解、人権意識の育成が一層求められると考える。

6. 課題

今回、新たに作成した指標に基づく量的分析結果の詳細は報告できなかったが、事前・事後調査結果から、ほとんどの項目が0.1%水準で有意に差があることがわかった。

一方、有意差のなかった2項目を精査したところ、質問項目内容の表現方法を検討する必要性が明らかになった。

今後の課題は、この2項目の表現を修正するとともに、社会環境・制度の事例として教育現場により身近な内容を加えるなど指標の手直しをしながら、教員を目指す学生の人間性を育み、それが教育現場で活かせるよう、授業デザインの構築を目指していきたい。

本稿は、日本家庭科教育学会第61回大会（2018）の発表内容に加筆したものであり、科研費基盤研究（C）17k04903の一部である。

注

- 1) 中央教育審議会は「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について－学び合い、高めあう教員養成コミュニティの構築に向けて（答申）」（平成27年12月21日）のなかの「これからの時代の教員に求められる資質能力」で、「自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を、生涯にわたって高めていくことのできる力」などが示されているが、筆者らは、その前提となる「教員として不易の資質能力」の1つである「総合的人間力」が十分育成されてきていないと捉える。
- 2) 大杉昭英ら. (2015). 教員養成等の改善に関する調査研究（全体版）報告書. 国立教育政策研究所（平成25～26年度プロジェクト研究）の「第一部 教員の資質・能力及び養成段階の到達目標に関する研究の概要」のなかで、「人間性を獲得していく視点を重視した教員養成の在り方を構想する必要がある」とした。
- 3) 富田道子, 小松原明哲. (2012). ユニバーサルデザイン教育プログラムの開発：高等学校家庭科における試み. 人間生活工学, 13, 1, 48-54.

参考文献

- 石森広美. (2013). グローバル教育の授業設計とアセスメント. 東京：学事出版.
- 小谷教子他. (2018). 中学校, 高等学校, 大学の「共生・人の多様性理解」を促す学習についての実証的研究. 敬愛大学国際研究, (31), 67-83.
- 富田道子. (2014). 共生社会の実現をめざした「人の多様性」の理解に関する授業実践：中学校における試み. 第5回国際ユニヴァーサルデザイン協議会アワード2014受賞
- 富田道子, 松岡依里子. (2015). 家庭科UD学習手引書の有効性の検討：小学校教員への試み. 日本家庭科教育学会, 58(2), 100-109.

Class Design to Enhance Human Rights Awareness in Home Economics Education of Teacher Training College : Focusing on indices for Assessment

TOMITA Michiko

Hiroshima Cosmopolitan University Faculty of Childhood Education

ISHIGAKI Kazue

Faculty of Education, Art and Science Yamagata University

SAITO Mihoko

Faculty of Education, Kagoshima University

KODANI Noriko

Faculty of International Studies, Keiai University

Key words: home economics education, human rights, assessment, class design, teacher training university